
さあ野菜痛めを作ろうか

真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さあ野菜痛めを作ろうか

【Zコード】

Z3608T

【作者名】

真

【あらすじ】

魔王に殺されてしまった主人公。しかし、魔王にチート能力をもったネギまの世界へ行く。
かなりアンチになる予定なので、それが嫌なら見ない方がいいと思います。

プロローグ（前書き）

初投稿です。駄文で申し訳ないですが読んでやってください。

プロローグ

「ここ何処だ?」

家で寝ていたはずなのにいつの間にやら俺は変な城の前に居た。
なんかかなりのイケメンがこっちを見ているが・・・

「うん、夢だな。よし寝るか。」

だが、俺はあまりにも眠いので考えることを止め、欲求に身を委ねることにした。

「お前、寝るのはいいが。寝たら存在が消えるぞ。」

しかし、なにやらイケメンが話しかけてきたようなので相手をしてやることにした。(かなりめんどくさいが)

「俺の眠りを妨げる貴様は誰だ。俺は早く寝たいんだよ。」

「我か? 我はお前達から見れば悪魔かな。しかも、王だ。」

「(えー、この人何言つてんの。頭大丈夫なのか? 悪魔の王つて魔王のことだろ。うわっ、邪氣眼みたいなやつ初めて見たわ。)あー、はいはい魔王様ね。きぐーだねえ、俺もよく魔王つて呼ばれるんだよね。まあネトゲとかの中だがね。で、俺になんか用でもあるの? つーかここは何処だ?」

俺は目の前の自称魔王の反応を観察する。

「誰が邪氣眼だ!! お前、我が魔王だと全然信じていないな? そして、ここは魔界の最下層にある我が城、魔王城だ!!!」

なんか知らんが、1人でテンションが上がった自称魔王。だが、(こいつ俺の考えたことを読んだのか? しかも、魔界か。そう言われば、周りは如何にも魔界つて感じがするがあり得んだろう。だとすると、やはり夢か?)

「魔王だからな。人間の思考を読むなど簡単なことだ。それと、これは夢ではないぞ。お前は死んだのだからな。」

「また、考えたことを読みやがって。はあ、まあいいか・・・って、

待て貴様今何て言つた？俺の聞き間違えではなければ、死んだとかなんとか言わなかつたか？」

俺は自称魔王の言葉に耳を疑つて、もう一度聞き返した。

「ああ、お前は死んだぞ。と言つが、我が間違えて殺したな。」

「はあーーー！？それマジで言つてんの？死んだつて、今月は楽しみにしてたゲームとかマンガが発売だつたのにーー。絶望した。こんな理不尽な世界に絶望したーー。この悲しみを何処にぶつければいいんだ。責任者出せー。責任者ーーーって、待て貴様間違えて殺したこと。貴様の責任かー。死ねえ。」
俺の黄金の右ストレートが唸りをあげる。が、流石は自称魔王楽に避けられていまう。

「待て、落ち着け。流石に魔王の我でも悪いと思つてな。詫びに生き返らしてやるためにわざわざ天界に行くはずのお前の魂を魔界まで引っ張ってきたのだ。」

「えつ、マジで！？なんだよ、それを早く行つてくれよ。そしたら、いきなり殴りかかつたりしなかつたのに。じゃあ、早く元の世界に生き返らしてくれよ。」

俺は、話しのわかる魔王で（自称はもういらないだろ）良かつたと思いつつ。魔王の返事を待つ。

「無理だな。」てめえ、今度こそ受けとみる黄金の右ストレートを。「だから、当たらんわ。」

またしても、俺の黄金の右ストレートは空を切る。

「まあ落ち着いて最後まで話しを聞け。残念ながら、元の世界でのお前の体はなくなつているのだ。」

「どうこうことだ？貴様は魔王なのだから、体ぐらり作り出せるだろ？」「

魔王のくせに、それぐらいも出来ないのかと、疑問に思つ。

「体ぐらいなら簡単だ。『なら！』まあ待て。一から説明していく。まず、お前を何故殺してしまったのかだ。これは、我を裏切ろうとした奴を殺そうとしたからだ。我が直々に殺そうとしたのだが、遊び過ぎて人間界に逃げ込んでしまった。だから、我も奴を追い人間界に入った。そして、どどめを刺そうとした時に、強く攻撃をしてしまい。その下に住んでいたお前ごと射ち抜いてしまったのだ。『死んだ経緯はわかつた。それだけなら別に生き返せない理由はないだろう。』

ものすごくイライラしているが、最後まで話を聞くために先を促す。

「そうだ、これだけなら別にどうとでもなつたのだがな。生き返らせてやれない理由は大きく三つある。一つめは、我的攻撃でお前の体が塵と化したからだ。体が綺麗に残つていれば大丈夫だったのだがな。二つ目は、お前が我ら悪魔に性質が似ていたからだ。まあだからこそ我的力をお前に使えるのだがな。最後に、天界がお前の生きていた跡を消し去つたからだ。お前は本当ならば、別の世界に産まれるはずだったのだが。天界のミスでこの世界の人間界に産まれたのだ。だから、天界の奴等はこれ幸いとこの機会にお前の存在を消し、正しい世界に戻そうとしたのだ。なので、私の力で人間界に復活させてしまえば、お前は天界から沢山の刺客に命を狙われることになる。この三つの理由によつて、お前をそのまま生き返らせることはできないのだ。ちなみに、最初お前が異常な睡魔に襲われたのは、お前の魂に我的力が馴染んでいなかつたために、天界の修正力に負けていたので異常な睡魔に襲われたのだ。そのまま寝ていたら存在が消されて正しい世界でミジンコに生まれ変わる予定だったな。」

「ミジンコ！？良かつた眠らなくて。それより、理由はわかつたがなうどうやつて生き返るんだ？他の世界でも結局イレギュラーとして消されてしまうのではないか？」

ミジンコに生まれ変わることがなくなつたのに安堵しつつ、疑問を

ぶつける。

「そのことなのだが、今人間たちの間で流行っている。アニメやマンガ、ゲームの世界に転生をやってもらおうと思つてゐる。これらの世界なら天界も干渉をしてかないからな。」

「テンプレキター！－マジでそんなことが有るなんて。転生物の二次小説読んで実は憧れてたんだよな。もちろん特殊能力とかくれるんだよな？」

憧れのチート転生が出来るのがわかり、一気にテンションがMAXになる。

「送る世界はこちらで決めさせてもらうが、能力についてはお前に三つまで決めさせてやろう。」

「三つか。うおー、何にしようかなー。あつ、ちなみに何処の世界なんだ？」

「魔法先生ネギまの世界だな。ちなみに、魔法先生ネギまの平行世界だから、原作ブレイクしても全然問題ないからな。大いにやつてくれ。基本的な魔力と気は魔力はこのかの二倍、気はラカンより少し多いぐらいかな。」

「ネギまか。女の子たちは好きなんだがな、あの野菜とかぬらりひょんは大嫌いなんだよな。まあ原作ブレイクOKなら大丈夫か。よし、ネギまなら戦闘技術が必要になるな。じゃあ、一つ目の能力はテイルズオブヴェスペリアの全術技とユーリの剣術・身体能力を頼む。ちなみに術技は最初からMAX鍛度で。」

テイルズシリーズはヴェスペリアが一番好きなんだよな。特にリタがお気に入り。

「いいだろう。術はネギまでの魔力を、技は氣で使つようにしておくからな。」

「サンキュー。よしこいつ日は、BLEACHの全斬魄刀をくれ。」

「ふむ。なら、出したい斬魄刀を思い浮かべると出てくるFateの王の財宝みたいな感じにしてやろう。それと、サービスで卍解もちゃんと出来るようにしておこう。」

「三つ目は魔道具・魔道薬作りの才能で頼む。」

「なら、作りたい物のレシピがすぐに浮かぶよ」としておくな。よし、この三つで確定だな？もう変更出来ないぞ。」

「ああ。これだけで十分だよ。」

しかし、これはかなりのチートだな。斬魄刀の鏡花水月を使えばほぼ無敵だし。

「では、能力も決まつたことだし、そろそろお別れだ。せいぜい我を楽しませてくれよ。じゃあな。」

魔王がそう言いながら指を鳴らすと俺の足下に穴があいた。

「えっ？ ちょ待てやーーーーー！ 貴様は絶対いつか殴つてやるからなー。」

俺は、いきなりあいだ穴に落ちていく。そのまま落ちていくと、だんだん意識が遠くなつていき。そして、視界は暗転した。

プロローグ（後書き）

自分の文才の無さに絶望した。
週に一、二回は投稿出来たらいいと思つてます。

第一話 転生完了×少女×凜々の明星（前書き）

待つてた方も待つてなかつた方もお待たせしました。第一話です。
ちなみにタイトルはハンター×ハンターの真似してみました。

第一話 転生完了×少女×凜々の明星

「しゅーつよー。」

今日のギルド活動が終わった。

あつ、俺の名前はユーリ・ローウェルだ。あのくそ魔王にネギまの世界に送られた者だぜ。何故に俺がユーリの名前を名乗っているかと言つと・・・

「ユーリ何処だ?」

俺が目を覚ますと木に囲まれていた。何故にこんなところで寝てんだ?

えーっと。ああそうだ。魔王の奴に穴に落とされて氣を失ったんだ。「てつ、あのくそ魔王が。いきなり穴に落としやがって。ぜつてえぶつ殺・・・あつもしかしてここのはもうネギまの世界じゃねえの?」俺は確認の為に立ち上がり周りを見渡す。しかし、何か違和感を感じた。

「あれ? 何かいつもより目線が高い気がするぞ。」

俺は背は平均より低く160しかなかつたはずだ。なのに、今は確実に180ぐらいある。どうなつてやがるんだ?

そう考えていると、足下にカバンがあるのに気づいた。そのカバンを開けてみると、手紙が目についた。

「なになに。えー、目が覚めてこの手紙を読んでいると思う。とりあえず、転生には成功した。能力もちゃんと使えるはずだ。まずそこは原作開始のだいたい五年前の魔法世界だ。体を慣らしたりするために少し前にしておいた。カバンの中にいろいろ入れておいたから頑張ってくれ。」

P・S・お前の体を不老にしておいた。不死ではないから大怪我をすれば死ぬからな。だが、病氣や呪いには耐性をつけておいた。P・S・のP・S・最後に、お前の体テイルズオブヴェスペリアのゴーリ・ローウェルにしておいたから楽しんでくれ。

by魔王

・・・

えつ。

カバンをあさり鏡を取り出して覗きこむとそこには、どこからどうみてもユーリが写っていた。

「マジで！－うおー、テンション上がるわー－－ユーリだよユーリ。なかなかいい仕事するじゃねえかあのくそ魔王。」

テンションが上がり跳ね回って喜んでいると、

「キヤーー。」

と近くから悲鳴が聞こえた。

「なんだなんだ？悲鳴か？うーん。行つてみるか。さすがにこのまま放置はな。それにもしかしたら能力のテストも出来るかも知れないしな。」

そんなことを考えながら悲鳴がした方へ近づく。すると一人の女の子がそこそこの大さのドラゴンに襲われていた。

「ありやヤバそうだな。とりあえず剣、剣つと。うーん。まあ『浅打』でいいか。つてヤバッ。」

「誰か助けてよお。」

いつの間にか今にも女の子はドラゴンに食べられそうになつていた。

「いやあ。死にたくな「蒼破つ－！」えつ？」

「大丈夫かお嬢ちゃん？」

私はお母さんにお花をプレゼントするために、ドラゴンがいるから絶対に一人で入つたら駄目と言われていた森までお花を摘みに来ていた。

「こんなに綺麗なお花ならお母さん喜んでくれるよね。」

ドラゴンは恐いけど、出来つことはないと思って一人で来たけどやつぱり出て来なかつたなあ。そう考えながらお家に帰つていたら、何かにぶつかつて倒れてしまつた。

「キヤ！？ いつたーい。もう何なの？ ……、キヤーー。」

そこにはおつきなドラゴンがいた。私はドラゴンの足にぶつかつたようだつた。私は急いで立ち上がり走つて逃げたら、ドラゴンが追いかけてくる。必死に走つていたら木の根に引っ掛かり転げてしまふ。後ろを見るとドラゴンはすぐそばまで来ていた。

「誰か助けてよお。」

私は食べられると思つた。お母さんごめんなさい。もう約束破つたりしないから助けてよお。しかし、ドラゴンはその大きな口を開けて近づいてくる。

「いやあ。死にたくな「蒼破つ！！」えつ？」

目の前にいたドラゴンが吹き飛んで行つた。私が混乱していると優しい声が聞こえた。

「大丈夫かお嬢ちゃん？」

声の方を向くと、剣を持つた黒い髪の毛の人人が立つていた。

「ちょっと待つてな。すぐに済むから。その木に隠れてろ。」

私は声が出ずく首だけで肯定をあらわし、すぐに木に隠れた。しかし、気になつたので、少し顔を出し覗いてみた。

危なかつたあ。ギリギリ蒼破刃が間に合つた。ドラゴンを吹き飛ばせた。

「ちょっと待つてな。すぐに済むから。その木に隠れてろ。」

そう指示を出すと女の子はうなずきすぐに木に隠れた。

「さあーて、ドラゴンの方は？ありや、これじゃほとんど無傷か。仕方ない、『斬月』出でこい。卍解『天鎖斬月』。いくぜ、『月牙天衝』。」

浅打を使つた蒼破刃ではほとんど傷をつけられなかつたので浅打を戻し、斬月を取り出した。このままでも大丈夫だが、卍解の威力を確かめたかつたので天鎖斬月で月牙天衝を使ってみた。

「マジか！？全然力込めずにやつたのに。やつべえ。卍解はよつぽどじやなれば使つちゃまずいな。」

一割程の力にもかかわらず、ドラゴンは真つ二つのはもちろん。後ろの森は1km程が丸太になつていた。果然とその光景を見ていると、背中に軽い衝撃があつた。見てみるとさつきの女の子が泣きながら抱きついている。

「ほらほら泣くなよ。もう大丈夫だから。お嬢ちゃんは何て名前なんだ？」

そう質問しながら頭を撫でてやると少し落ち着いて名前を教えてくれた。

「私はリタ。リタ・モルティオだよ。お兄ちゃんのお名前は？」

「そつかりタつていうのか・・・えつー？リタだつて？」

驚いてその女の子を見てみるとテイルズオブヴェスペリアのリタ・モルティオにそつくりだつた。

「どうしたのお兄ちゃん？私のこと知ってるの？」
不安そうな顔をしてリタがたずねてくる。

「いや、俺の知り合いと同じ名前だつたから驚いただけだよ。」「そう言つてやると安心したのか笑顔を見せてくれた。

「そつか。よかつたあ。お兄ちゃんのお名前は何てい？」

改めてリタが名前をたずねてきたが、どうしようか。

「（本当の名前は覚えてないんだよな。うーん。偽名も思いつかないし、ユーリの名前を使うかな。）俺の名前はユーリ・ローウェルだ。ユーリって呼んでくれ。」

「コーリお兄ちゃんだね。助けてくれてありがとう。ねえお兄ちゃん私のお家に来てよ。助けてくれたお礼がしたいの。お母さんにも会って欲しいから。お願ひお兄ちゃん。」

そう言いながらリタが手を引っ張る。

「わかつたわかつた。別に気にしなくていいんだけど、お言葉に甘えるよ。」

「ほんと~やつたあ。じゃあいひちだよ。」

リタに手を握られながら案内されて行く。

「「「」」」が私のお家だよ。お母さんただいま。お密さん連れてきたよ。」

「お邪魔しまーす。」

ここに来るまでの間リタが教えてくれたが、リタの家は父親がいらっしゃい。しかも、最近は母親も病にかかってしまったそうだ。

「お帰りなさい、リタ。リタがお密さんを連れてくるなんて初めてね。」「ホッ。お密さんもゆつくりしていいってください。」

「お母さん、これプレゼント。きれいなお花でしょ。」

リタが母親に贈んできた花を渡した。しかし、母親はその花を見ると「リタ！この花はドラゴンのいる森に生えてる物じゃない。危ないから行つてはダメだと約束したでしょ！……ドラゴンに出会つたらどうなるか。」「ホッ」「ホ。」

リタを叱りつけようとするが咳き込んでしまう。

「「ごめんなさい、お母さん。もつ約束破つたりしないから。けど、もう大丈夫だよ。森にいたドラゴンはコーリお兄ちゃんが倒しちゃつたんだから。」

リタは何故か得意気な顔をしながら言ったので、俺は少しイラッとした。なので、軽くチヨップをしてやめさせる。

「何故リタが得意気に言つている。貴様は俺がいなかつたら今頃ド

ラゴンの腹の中だろうが……」

それを聞いた母親は、ヨーリに頭を下げる。

「そうだったんですか。本当にありがとうございました。あなたはリタの命の恩人です。どうかごゆっくりしてこつてください。ほら、リタももう一度お礼を言いなさい。」

「ヨーリお兄ちゃん、今日は助けてくれて本当にありがとうございます。」

「頭を上げてくれ。別に気にしなくても大丈夫だ。たまたま居合わせただけなんだからな。」

二人に揃ってお礼を言われ、自分では能力のテストをしただけなので、逆に申し訳なくなる。

「お礼といつてはなんですが。ちょうど、お昼ご飯を作るとこりだつたので食べてください。」

それくらいならと、お昼ご飯を駆走になることにした。

お昼を『』駆走になり、リタが離れて後片付けをしてくれているので少し気になつたことを質問する。

「なあ、リタに聞いたんだが、病氣なんだってな。大丈夫なのか？」

「はい、なんとか『正義の魔法使い（マギスティル・マギ）』の方にも見てもらえたのですが。治すのにかなりのお金を要求されてしまい。

症状は日に日に悪くなつてきていまして、なんとかまだ普通に動けますが・・・倒れたらと思うと。」

そつロタの方を見ながら答えてくれた。

（やつぱりこの世界の正義の魔法使い達はクズか？）

俺は少し考え、魔王にもらつたカバンをあさり目的の物を探す。

「すまんが、俺にも体を診させてもらえないか？確認しないことにはわからんが、多分治せるかもしれん。」

俺はカバンから目的のアイテムを見つけたので聞いてみる。

「本当にですか！？」しかし、私たちにはお支払い出来るお金が・・・。

「母親はそう言って顔を下げてしまつ。

「金なんていらねーよ。俺を『正義の魔法使い（クズ共）』といつしょにすんな。で？」「うすんだ？」

クズ共と同類にみられ、語気が荒くなつてしまつた。

「すみません。あの、ではお願ひしてかまいませんか？」

「わかった、だが確實ではないからな。じゃあ、少し診させてもらうぜ。」

承諾がされたので、先ほど取り出したスペクタクルズを使う。そうすると、頭の中に情報が浮かんでくる。

「どうでしようか？」

母親は不安そうに聞いてくる。

「これなら大丈夫だな。じゃあ治すぞ。『リカバー』」

俺はテイルズシリーズでは定番の回復魔法を唱えた。

「どうだ？一応治っているはずなんだが。」

「はい、とても楽になりました。もう体に違和感がないです。本当にありがとうございました。」

母親は感極まり泣きながらお礼を言つてくる。リタは母親が泣いていることに気がつき近づいてきた。

「お母さん、どうしたの？お兄ちゃんになんかされたの？」

そう言いながらリタはこちらを睨んでくるが、母親が

「違うのよリタ。お母さん、病氣が治ったのよ。コーリさんが魔法で治してくれたの。」

「ほ、本当に？お母さん、もう苦しくないの？よかつたあ。コーリお兄ちゃん、本当にありがとうございました。」

リタも母親が治つて嬉しいのか、笑顔を浮かべながら涙を流している。

「気にはすんな。俺には力が有つて、田の前には笑顔になるべき困つている奴がいた。それだけだ。」

「本当にありがとうございました。どうやってお礼をすればいいか。

「母親が頭を下げる。」

「だから気にしなくていいさ。俺は俺の正義を貫いただけなんだから。」

「そう言つてやると、リタが問いかけてきた。

「せいぎ？ それって『正義の魔法使い（マギスティル・マギ）』ってこと？ お兄ちゃんつて正義の魔法使いだつたんだ。」

「俺は俺。あんな奴らとは違うさ。正義とは自分で考えてみつけるもんだ。だがあいつらは人に正義を押し付ける。しかも、自分たちが絶対に正しいと盲信しちまつてるからやうに質が悪い。リタも頑張つて自分の正義を見つけてみな。」

「頭を撫でてあげながら言つてやる。」

「うーん。よくわかんないけどわかった。頑張つてみるね。で、お兄ちゃんは何をやつてる人なの？」

「俺か？ 俺はな（どうしようかなあ。とりあえずやりたいことはエヴァと千雨と超を助けるぐらいしかないしな。うーん。そうだ。ユーリになつたんだからギルドつくろう。）ギルドを始めたからメンバーを探してくるんだ。」

方針は決まったので話しやるとリタが

「じゃあ私がお礼にメンバーになつてあげる。ねえ、いいでしょ？」

「いや、俺は別にいいんだが、リタだけで決めるもんじゃないだろ。」

「そう言つて母親の方を向いてみると

「あの、出来れば連れて行つてやつてもらえませんか？」

「なつ！ いいのか？ まだ会つたばかりの俺に娘を預けるんだぞ。」

母親の意外な答えに驚き確認する。

「大丈夫です。あなたは見ず知らずの私たちを助けてくれましたし、あなたの目を見れば悪い人ではないのはわかります。それにリタにはもっと大きな世界を見てもらいたいですから。」

「そうか。わかつた。本当にいいんだな？ 危険な目にあうかもしけ

ないぞ。」

最後にリタに確認をする。しかし、リタは笑顔を浮かべながら
「大丈夫だよ。またユーリお兄ちゃんが絶対助けてくれるから。」
「はあ。しょうがない。ギルドに入るからにはビシビシ鍛えるから
覚悟しておけよ。」

とりあえず一人目の仲間ができたが、頑張って育ててやるか。

「ねえねえお兄ちゃん。そういえばギルド名って何なの？」

リタがギルド名について聞いてくる。

「ギルド名か？ギルド名はな。

『^{プレイヴェスペリア}凛々の明星』だ。』

ということでおれはユーリと名乗りギルドを始めることになったんだ。ギルド発足から三年たつた。ギルドの人数もかなり増えてきたので、凛々の明星の活動はテイルズオブヴェスペリアに出てきたギルドを参考にして、五つの部隊にわけたんだが、

一つ目は、傭兵部隊にした。これは報酬次第でだいたいの事をする部隊だ。まあ一応依頼人の調査をした結果でしか依頼は受けないが。二つ目は、魔獣狩りを専門の部隊。これもちゃんとした調査をしてから依頼を受けることにしている。

三つ目は、武器や魔道具の製作・販売の部隊。これは一般用・戦士用・魔法使い用・特別注文、にわかれての販売になっている。

四つ目は、遺跡発掘部隊。遺跡の調査・探索・発掘を主に活動して、珍しいアイテムを探している。

五つ目は、その四つを管理する事務部隊。他の部隊の金の管理や、依頼への人員配分をする。

この五つの部隊で凛々の明星はやっている。

「ユーリ、一人でなにやつてんの？そつちの仕事が終わつたならこつち手伝つてよね。まったく、気が利かないんだから。」

「はあ。リタ、一応俺はこのギルドのトップなんだからもう少し敬意を持つてくれよ。」

俺が仕事が終わつたのでくつろいでいると、リタがやつてきた。

「敬意つて、はつ。あんたがもつとしつかりしてくれるなら敬意ぐらいいいくらでも持つてあげるわよ。」

あれから三年でリタはかなり成長した。今では原作のリタそつくりになつてしまつた。

「昔はいつでもお兄ちゃんつて呼んでくれて可愛かつたのに、はあ。もうリタは俺が嫌いになつたんだな。お兄さんは寂しいよ。」

そう言つて悲しい表情をしてみると、リタが慌てて

「お兄ちゃんが嫌いなわけないじやない。ただ、まだ私は仕事中なんだか。」

とちょっと拗ねた感じで言つてくる。

「わかつてるよ。すいし昔の事を思い出してただけだから。さあ、リタの仕事片付けようぜ。」

頭を撫でてやり、仕事にとりかかる。

「わかつてないわよ。私はお兄ちゃんが・・・。」

「ん？なんか言つたか？」

リタが小さな声で俺を呼んだ気がしたので聞き返したが。

「なんでもないわよ。ばかっ！…ひとつ終わらせて帰るわよ。お兄ちゃん。」

第一話 転生院ア×少女×凜々の明星（後書き）

自分の文才の無さが恐ろしい「ゲホビ」です。

ネギまのキャラクターを出さずにリタ出しがやいました。他のティルズキャラクターは出さないと思つので、勘弁を。

次回はちゃんとネギまのキャラクターを出します。ですが、その前にキャラクター紹介をはさみます。

キャラクター紹介

名前	ユーリ・ローウェル
年齢	転生時19歳
身長	22歳
転生前	160cm
転生後	180cm
能力	? テイルズオブヴェスペリアの全術技とユーリの剣術・身体能力
	? BLEACHの全斬魄刀と斬魄刀の始解・卍解の発動
	? 魔道具・魔法薬の製作スキル
	? ネギまでの簡単な初級攻撃魔法・中級魔法や浮遊魔法・瞬動・虚空瞬動
その他	ギルド『凜々の明星』のボス 不老 ユーリの体

カロルのカバン

変態ドS

解説

魔王に間違えて殺されてしまい、ネギまの世界に転生をした今作の主人公。転生前はかなりのゲーマーで、ネットゲーでは魔王と呼ばれていた。

高校三年で生徒会副会長だったが、仕事はほとんど会長に押し付けゲームをしていた。しかし、やる時はかなりやるのでそこそこ慕われていた。

パツと見かなりひ弱に見えるためよく不良に絡まれた。しかし格闘技を習つていたので遠慮なくぼこぼこにして逆に迷惑料として金を払わせていた。

自分も悪だが、腐った悪が弱い者を虐げているのを見るとキレる。矛盾しているが、誇りある悪が自分の正義だとしている。

性格は、めんどくさがりで興味が惹かなければほとんど動かない。しかし、一度興味を惹いたり、やりはじめたりしたら最後までやりとおす。

自分が楽しむためなら命を賭けることをよしとしているので、度々大怪我をする。

人をじわじわと追いこんでいくのが大好きで、特に女の子の涙目が好き。なので周りから変態ドSの称号をつけられた。

魔王に貰つたカバンはテイルズオブヴェスペリアに出てくるカロルのカバンだつた。なので、どう考へても大きさと容量が合わない。

リタ・モルティオ

年齢

ギルド加入時 12歳

15歳

身長

ギルド加入時 125cm

150cm

能力

? テイルズオブヴェスペリアのリタが覚える術技全て（秘奥技以外）

? ユーリと同じネギまの魔法や技術

? 魔道具・魔法薬の製作スキル

その他

凛々の明星のボス代理

解説

ユーリが転生してから初めて会った人物。ドラゴンに襲われているところを助けてもらつたり、母親の病気を治してもらつたりした。なので、お礼にギルドに入ると言いユーリについていく。しかし、本当は最初に助けてもらつた時ユーリに一目惚れしていたので離れたくなかった気持ちの方が大きい。

今では、本気でユーリに惚れている。なので、ユーリに他の女の子を近づけさせないようにするのに忙しい。

父親は旧世界の優秀な魔法使い。母親も旧世界人なので、魔法世界出身の旧世界人。

性格は、昔は甘えん坊で素直ないい子だつた。成長するにつれ仕事中や他の人の前ではユーリに甘えるのが恥ずかしくなりツンツンしてしまうが、一人きりや焦つた時は口調が昔の様になる。

真面目で仕事熱心だが、遺跡で珍しいアイテムが発掘されると仕事を放置し、自分の研究室に閉じ籠ってしまう。

ユーリと修行してかなり強くなつたが、模擬戦でユーリにいじめられているうちに、自分がMだと気づいた。

キャラクター紹介（後書き）

キャラクター紹介はまたどつかに挟みます。

第一話 手紙×侵入×遭遇（前書き）

今回も駄文で申し訳ないです。

第一話 手紙×侵入×遭遇

「ユーリ。聞きたい事があるんだけど…ってあれ?お兄ちゃんないじやない。」

私は仕事の話しでお兄ちゃんの私室を訪れるが肝心なお兄ちゃんがない。

「もう、どこ行ったのよ。いつもいつも黙つて出かけるんだから。はあ。」

お兄ちゃんはよく一人でフラツといなくなる。でも、いつも一週間ぐらいで帰つてくるので特に心配もしないが。

「ん?なにこれ手紙かな?」

お兄ちゃんの机の上にリタへと書かれた封筒が有った。

「珍しいわね。お兄ちゃんが手紙残すなんて。えーとなになに。」

おはーんばんちわ。ちょっと田世界に行つてくる。いつ帰るかはわからないのでギルドは任せた。じゃあよろしくな。

ううユーリ

はあーーー!?ちょっと待ちなさいよ。ギルドは任せたつて、バカじやないの。しかも、田世界でこいつ帰るかわからないとからざけすぎでしょ。それに、どうじょう!?.田を離すといつも女の子と仲良くなっちゃうのに。お兄ちゃんが盗られちゃう。私のお嫁さん計画が狂っちゃう!じやない。あーもー、お兄ちゃんのバカー!..!」

一方その頃、俺は目的地の麻帆良学園に到着していた。

「すっぺえー、生で見ると迫力が違うな!..!」

漫画やアニメで見た麻帆良学園に感動をして、写真を撮りまくって

いると

「お兄さんつてもしかして外から来たのかにゃ？」

女の子に後ろから声を掛けられた。

「そりだ。立ち入り禁止だつたから不法侵入してきた。」

と軽く答え、写真を撮り続ける。

「すうい！…どうやつて入つたの？」

「段ボールを被つてだな。」

「段ボール！？」

とりあえず、写真は満足したのでカメラをしまい振り返る。するとなんか見たことある可愛い女の子がびっくりしていた。

「そつ、段ボール。段ボールをバカにするなよ。某蛇の愛用品だからな。他にも・・・」

と適当に段ボールについて喋りながら考える。あの子つて絶対明石裕奈だよなあ。どうしようかな。

「すつすごいんだ、段ボールつて。裕奈ちゃん感心しちゃつたにゃ。」

「

「まあ嘘だが。」

「嘘なの！？」

「当たり前だ。普通段ボールがポツンと有れば不審に思つだら。」

「確かに！」

なかなかの反応に楽しくなりからかつていて、

「なにやつてんの裕奈ー。遊びに行くんじなかつたの？つてこの人誰！？」

ピンク髪をツインテールにした女の子がやつて來た。

「こやはは、ごめんごめん。ちょっと話し込んでしゃつてたよ。」

「どうやら一人は待ち合わせをしていたらしい。」

「それでこの人は誰なの？あつもしかして裕奈の彼氏！？」

まき絵はやはり俺が気になるようで更に裕奈に聞いている。

「違つつてば…」の人はわざわざ会つたばっかで名前も知らないよ。

「

裕奈が焦つて誤解を解こうとしているが、

「すまんが俺はもう行くぞ。追っ手が追いついて来たからな。」

遠くに数人の教師がこちらに走つて来ていた。それに気づき逃走の準備を始める。

「あれ、もう行っちゃうのかにゃ？」

「言つたろ、俺は不法侵入してきてたって。ほら、追っ手が来たから逃げないと。捕まる訳にはいかんしな。」

「えつ、不法侵入は本当だつたの！？」

「まあとりあえず行くからな。じゃ！」

準備が終わり逃走にはいる。しかし、最後に裕奈が声を掛けてくる。

「あつ！待つて、お兄さんなんて名前？」「

「ユーリだ。じゃまたな。」

俺はそう言つて裕奈達から離れて歩きだすと、そこそこ強めに認識阻害の結界を自作魔道具の指輪で発動する。「これぐらいなら普通の奴は気づかんだる。さて、とりあえず世界樹に向かうか。」

結界を維持しながら世界樹に向かつて歩きだすと、

「止まれ、ユーリ・ローウェル！！行かせる訳にはいかない。」

ガングロフリーーが現れた。が無視をして歩き続けるが、パン！！

「なんのつもりだ？。俺が誰かわかつているだろ。」

障壁で防いだが心臓の位置に銃弾が飛んできた。

「あの悪名高き、ギルド『凜々の明星』のユーリ・ローウェルだろ！！お前の様な悪は私が正義の鉄槌をくわえる。ここに侵入したことを後悔するのだな！！」

ガングロフリーーは俺からほとんど魔力を感じないのでなめている。コイツもうやつしたい正義の魔法使い（クズ共）のようだ。
ムカツクな、殺すか。

しかし、最後に一度だけチャンスを与える。

「警告だ。次に攻撃をしてきた場合、我ら凜々の明星への攻撃とし

しかるべき対応をする。そして、今頭を下げて消えればさっきのことも水に流してやる。」

「正義の魔法使いが悪に頭を下げるなど、あり得ない。悪は滅するのみだ！！！」

パンパン！！

バカは銃を撃ちながらナイフ片手に突っ込んでくる。

「人が優しくしてやつたのに、このバカ野郎が！！貴様は樂には逝かさんぞ！！出ろ。」

魔力の隠蔽を解除し、斬魄刀を呼び出す。そして、本氣の殺氣をぶつける。

「なつ！？」

さつきまでは余裕の表情だったが俺の圧力におされ、片膝をつき汗がにじんでいる。だが難とか立ち上がりこちらを睨み付けながら、「やはりお前のような危険人物を生かしておく訳にはいかない。」言い放つてくる。そして、魔力で強化したのか。放った銃弾は障壁を抜け、右頬をかすった。

「くつくつくつ、はあーはつは。当てた、当てたな。これで貴様を殺しても一応正当防衛の理由ができた。さあ、ショーの開幕だ！！」俺は人払いと認識阻害の結界を張り直し、

「搔き築れ・・・『正殺地蔵』」

斬魄刀を解放する。

「なんだ！？刀が変化したのか？だが、そんな刀で何ができる。」

ガングロファイー二は刀の形が変わったので一瞬困惑したようだが、あまり斬れそうな形状ではないことに油断したのか無用心に突っ込んでくる。

「はあ、無用心過ぎだろ。幻狼斬！！」

俺は一瞬で後ろに回り込み背中を斬りつけた。

「ぐはっ！？」

あまり深くは斬れなかつたが、この斬魄刀なら関係ない。

「なつなんだ！？動けない！？」

「バカが。相手の能力もわからないのに突っ込んで来るとはな。『斬つた対象物の四肢の動きを奪つ』それがこの疋殺地蔵の能力なんだよ。」

優しい俺はわざわざバカに能力を教えてやる。しかし、こいつは予想以上にバカな様だ。

「くつ、この卑怯者め！－毒なんて使うなど。正々堂々戦え！－！」本当に救えない程のバカだな。人の事を悪だと言いながら、卑怯？正々堂々？意味がわからん。もう駄目だ。ウザすぎる。

「この毒はな麻痺じゃなく、四肢の動きのみを奪うんだよ。つまり・

・・

グサツ！－

ガングロフィー－の右腕に刀を突き刺す。

「痛みは毛程も消えない訳だ！－ホラ－ホラ－ホラツ－－！」

「ギヤアアアア！－！」

何度も手足を突き刺すとギヤアギヤア五月蠅く悲鳴をあげる。イラついていたので最後に左腕を斬り落とす。すると、一番大きい悲鳴をあげる。

男の悲鳴など面白くもなんともないな。やはり、女の子の涙目と懇願の声が一番だよね。

「やめてくれえ。死にたくない。助けてくれえ。」

はあ、勝手に殺す氣で突っかかるて来て『助けてくれ？』はあ。

「五月蠅いしウザい。もういい、死ねよ。」

俺は自分勝手な正義にイラつきもう殺すことにして、刀で首を落とそうとした時。

「すまないが、もうそれぐらいにして見逃してもらえないかい。」

「頼む。今は抑えてくれないかの。」

T3とぬらりひょんが現れた。

「ああ？なんで殺そと向かってきた奴を見逃さなきゃならんのだ。」

－

「ははーー！」これで終わりだユーリ・ローウェル。学園長・高畠さん、早くこの悪人を、「ウザいーー！」ウギヤ。「

二人が来たことで調子に乗ったバカを氣絶させる。

「そのところを難とか頼む。」

ぬらりひょんが頭を下げる。

「はあ萎えた。もういい、勝手にしろ。殺る氣も失せた。」「めんどくさくなってきたので、斬魄刀を消しカバンからソファーを出してくつろぐ。」

「彼の解毒をしたいのだが、解毒薬を持っていたらくれないかな？」

「ほつとけば一ヶ月ぐらいで治るだろ。」「

わざわざ治す氣はないので、適当に答える。

「で、これからどうするんだ？めんどくさいからさつとどじる。」「

「すまんが詳しい話を聞かせてもらいたいから学園長室に来てくんかの。」

「はいはい、じゃあさつとと転移をせひ。俺は動くのはめんどい。」「

極東最強の魔法使いなら転移ぐらいできるだろ。」「

「しょうがないの。高畠君、ここは任せせるぞ。」「

「わかりました。僕もすぐに行きますので。」「

やつと移動か。おつと、

「おい、高畠。そいつの腕はきれいに斬ったから治癒魔法がそこそこうまけりやくつつくぜ。まあ毒の方は世界最高クラスじゃないと解毒はできんがな。そのバカが土下座でもして頼むなら解毒薬をやつてもいいぞ。するとは思わんがな。じゃ早く転移しろ爺。」「

言いたいことは言つたので、爺に転移魔法を使わせる。俺はソファーに寝転んだままだが。

一方その頃のリタは、

「ちょっと誰かーー！ユーリがどこ行つたか知つてる人いない？早く

しないと計画があーーー！」ギルドメンバーにユーリの居場所を問い合わせていた。

第一話 手紙×侵入×遭遇（後書き）

いきなりガングロをボコつてしましました。
ユーリは気に入らない相手には変なあだ名をつけます。

第三話 妖怪×交渉×新居（前書き）

一ヶ月も更新出来ず大変申し訳ない。仕事が忙しくて全然書けませんでした。

少しずつ書いてなんとか書き終わりました。

第三話 妖怪×交渉×新居

「で、どうするんだ?」

学園長室に転移し一息してから妖怪に話しかける。

「そりやのう。とりあえず何故色々な意味で有名な君が此処に居るのか聞きたいかのう。」

「事務仕事が嫌になつたから逃げ出したんだが。暇だし、前から興味のあつた世界樹の研究に来ただけだ。」

世界樹以外にも興味はあるが、表向きの理由としてはこんなものだろ。

俺の言葉を聞いて妖怪は少し考えこんでいたが、

「そうか。しかし、君が不法侵入をし一人の教師に行動不能になる程の傷を負わしたことについてはどうする気じや?」

と聞いてきた。

「不法侵入は悪かったが、あのガングロはアイツが悪い。俺がわざわざいきなりの心臓への発砲を許してやつたのに実力の差もわからず向かつてくるから。まあ、アイツに関してはおいといて。不法侵入したから割安で依頼を一つ受けてやるよ。」

いつもならこんな自称正義の魔法使いの依頼なんて受けないが、麻帆良に留まるためには仕方がない。それに、この妖怪なら俺みたいな奴は必ず・・・

「なら、君にはこここの教師と広域指導員、あと夜の警備員をしばらくやつてもらおうかの。ガンドルフィーー君の抜ける穴を埋めないといけないから。」

やはり取り込もうとしてきたな。予想通りだ。

「俺は別に構わないが、あのガングロみたいに突つかかってきたらそいつの命は保証せんぞ。それでもいいならやつてやるよ。」

そして、こう言えば

「一度目はできるだけ加減をしてもらえないかの。痛い目にあえれば

大人しくなるはずじゃし。どうじゃ？

「わかつた。一度目は加減しよう。だが、絶対ではないからな。そいつが俺以外を巻き込んだ場合は殺す。」

「うーむ、まあそれでいいじゃろ。では、仕事内容についてじやが。教師については女子中等部の2・Aで副担任をしてもらひ。担任は高畠君じやから彼に色々聞いてくれ。教える教科は数学かのう。広域指導員についても高畠君に聞けば大丈夫じゃろ。夜の警備は顔見せの時に詳しく説明する。なにか質問はあるかの？」

よし、計画通りだ。ああ言つておけばもしもの為にこの学園で一番目に強い高畠の下に俺を組み込む。そうすれば2・Aの副担任にされる。チョロいな。

「特に問題はないが、できれば担当教科は国語にしてもらいたいんだが。」

別に数学は苦手ではないがやはり得意だつた国語が楽だしな。
「それくらい別に構わんよ。」

「よし、依頼内容は不満はない。次は期間と料金だ。期間は俺が副担任をする2・Aが高等部に上がるまでの約二年間を基本とするが一年以上働いたら自由に辞める権利が欲しい。俺にも色々あるから、あっちは戻らないといけなくなるかもしないしな。料金については普通の魔法教師の給料と同じで。そして、期間中に他の依頼をしたければ別途に料金を請求する。期間中の依頼についてはできるだけ受け取ってやるが割引はしない。これで良いなら依頼を受けよう。」
まあ、こんなものだろ。魔法教師の給料がいくらか知らんが割安にはちがいないだろ。期間もこいつらにはちょうどいいだろうしな。

「うむ。大丈夫じゃろ。ではよろしく頼むぞい。」

「ギルド『凜々の明星』のユーリ・ローウェル。依頼を受諾した。
こちらこそよろしく頼む。」

ソファーに寝転び会話をしていたが、一応めんどくさいが立ち上がり軽く頭を下げて依頼を受ける。

すぐにはまたソファーにダイブしたがな。

「コンコン、ガチャ。

「失礼します。学園長後始末は終了しました。」

「ちょうどいいタイミングで高畠が戻ってきた。

「おお。ちょうど良かった。彼が君のクラスで副担任をすることになつたので色々教えてやつてくれないかの。」

「あつはい、わかりました。」

高畠は爺が俺を取り込むことを予想していた様ですんなりと了承する。

「僕は高畠・ト・タカミチ、これからよろしく頼むよ。」

「ヨーリ・ローウェルだ。よろしくな。」

高畠が自己紹介をわざわざしてきただので、面倒だが自己紹介を返す。ソファーに寝ころんだままだがな。

「そうだ。おい、妖怪」「妖怪は止めてくれ……」ちつ、じゃあ爺。俺はどこに住めばいいんだ？」

そういうえば、住む場所をどうするか決めていなかつたので爺に聞いてみる。

「おお。そうじゅのう。生憎と今は教員寮に空室がないくての。そういうや！－ちょうど女子寮の管理人が止めてしまつての、お主に管理人を「断わる！－」ひょ！？」

「バカか貴様！－俺は男だぞ。しかも、俺はバカ共に狙われる可能性があるんだから危ないだろ。俺はどこか一人で住むべきだらうが。貴様のその長い頭には脳みそが詰まつてないのか。」

爺が何のつもりか知らんが、バカな発言をしたので少しブチッときてしまつた。

「そつそつじやな。わかつた。どこか一軒家を探しておこへ。」

爺は慌てどこかに電話する。

「一つ聞いてもいいかい？」

「なんだ。」

爺が家を探しているので高畠が俺に質問をしてくる。

「君は意味もなく人を殺したことがあるかい？」

「ああ？あるわけないだろ。俺は何より罪のない無関係な奴が傷つ
くのが嫌いなんだよ。」

ポケットに手を突っ込んで殺氣を出しながら聞いてきたが、特に気
にせずカバンから漫画を取り出し読みながら軽く答えてやる。
高畠はその答えに満足したのか殺氣を引っ込める。

「どうか。悪かったね、いきなり変なことを聞いて。」「
気にすんな。」

軽く高畠が謝つてきたが短く返してやる。

「ユーリ君、家が見つかってぞ。家具はいるかの？」

そういうしていふうちに家が見つかってぞらしい。

「家具はいらん。必要な物はカバンに入っているからな。で、場所
はどこだ？」

「了解した。場所は今から案内人がくるからいつしょに行けばわか
るわい。」

「わかつた。それで、仕事はいつから始めるんだ？」

とりあえず、仕事をいつから始めるのか聞いていなかつたので聞い
てみる。

「色々準備があるから、明後日になるかの。明日は学園の地理でも
確認しておいてくれ。」

まあ、そりやそうだな。

コンコンッ

「学園長。案内にきました。」

話しているうちに案内が到着したようだ。

「うむ、わかつた。」

「じゃあ、よろしく頼むな。」

「明後日のことは明日の夜にでも連絡するから。」
ソファーと漫画をカバンにしまい学園長室から出していく。

「学園長。本当に大丈夫なんですか？」

「大丈夫じゃ。色々噂はあるが彼は一般人たちからはかなり慕わ
れているらしいしの。」

確かに少しばかり不安じやが彼程の能力者を普通の魔法教師と同じ給料
で雇えるなら安いもんじゃ。

「まあ、しばらくは注意しておいてくれんかの。多分、問題は無い
と思つのじやがな。」

それに高畠君があればなんとかなるじやない。

「わかりました。では、失礼します。」

「はあ、疲れた。」粗方家具の配置も終わつたのでベッドに飛び込
む。

用意された家は、庭付きの一軒家だつた。場所は女子寮から1km
程の辺りだ。

「女子寮に近いのは偶然なのか爺がわざとやつたのか。まあ、別に
いつか。それよりあの麻帆良に来たんだから楽しむぞ。・・・リタ
は何してんだろうな。」

一方その頃のリタは、

「あんたは何か聞いてない！？何でもいいから思い出して！！」

「そう言われてもですね。うーん・・・あつー確か世界樹で木刀が
作りたいとか少し前に言つてた気がしますね。」

「世界樹？旧世界の世界樹といえば、麻帆良の？誰か他の情報は無
いの？」

ユーリの情報を少しひきこもっていた。

第三話 妖怪×交渉×新居（後書き）

仕事がまだまだ忙しいので更新は不定期になります。

第四話 初登校 × 初授業 × 初尽くし（前書き）

完成しました。

少しずつ書いたので変かもしません。

第四話 初登校×初授業×初��くし

「みんなに発表があるんだ。今日から新しい副担任の先生がきます。

朝のH.R.の時にコーリ君のことを発表をする。

「先生！私にはそんな情報は入ってないですよ。いつきましたんですか？」

みんなはざわついているが、やはり朝倉君は質問をしてくる。

「実は今年度の始まりにくるはずだったんだけどね。色々手違いで遅れてしまつていたんだよ。」

本当のこととは言えないので、コーリ君の設定を話しておく。

「そうだったんですね。じゃあ次は、「先に先生に教室に入つても

らいたいんだけどいいかい？」そうですね。すみません。」「

「じゃあ、入つてくれるかい？」

まだ朝倉君は質問をしてこよびとしたので、それを制しコーリ君を教室に呼び入れる。

俺は今スースを着て学園長室に向かつっていたのだが、

「めんどくせえ。」

俺が麻帆良にきて一日後にはきた」とを若干後悔している。

「爺、きたぞ。」

ノックもなしに扉を開けて入る。「おお、来たかコーリ君。では、職員室に挨拶に行くぞい。」

爺はノックについて何も言わなかつたからもしなくていいな。

「彼が手違いで遅れていたコーリ・ローウェル君じゃ。担当教科は

国語で2・Aの副担任をやつてもらひ。色々教えてやつてくれ。」

「ヨーリ・ロー・ウェルです。こんな見た目と名前ですが、日本育ちなので国語についての心配はありませんので。まだまだ若輩ですがよろしくお願ひします。」

パチパチパチ

職員室で自己紹介をして歓迎の拍手があがるが何人か敵意剥き出しでこちらを睨んでいる。「うざい。」

席に案内され着席するとまず一人の男性教師が近づいてきた。

「初めまして、私は主任を務める新田だ。わからないことがあれば何でも聞いてくれ。」

「ありがとうございます。『迷惑をかけてしまつかもしれませんが、これからよろしくお願ひします。』

原作にも出ていた新田先生に挨拶をしてもらつた。

ネギまの世界で貴重な常識的な人物だが、魔法のせいで大変苦労をしている。多分、この人は千雨みたいに精神魔法の耐性があるのだろう。麻帆良で『普通』を少しでも『異常』と思えるみたいだったしな。千雨に比べたら微々たるものだらうが。まあ、男だし。あまり興味はないがな。

「ヨーリ君。それじゃ、教室に行こうか。」

「はいはい。」

高畑と共に教室へ向かう。

「クラスの名簿は渡しておいたけど、何人か名前を覚えられたかい？」

「んっ？ ああ、名前ね。一応全員覚えてきた。」

原作を読んだ時から大体は覚えていたから簡単だつたな。

「そうか、なら大丈夫だね。教室に着いたらまず僕が一人で入つて説明するから。それから入つてくれるかい。」

「わかつた。」

教室の前で待つていると高畑に中から呼ばれたので教室の中に入る。

そのまま教卓まで歩いていく。

「ゴーリ・ローウェルだ。国語を担当する。よろしくな。」

「先生！質問いいですか！」

軽く自己紹介をしたが、それでは満足しないらしく朝倉が質問をしようとすると、

「断る。」

「ええ、そんなあ。」

「嘘だよ。ほら、言ってみな。」

「ありがとうございます。じゃあこきますね。まずは名前をもつ一度お願ひします。」

どこからかマイクを取りだし、インタビューが始まった。

「ゴーリ・ローウェルだ。」

「歳と出身は？」

「23でこう見えて日本出身だ。」

「趣味と特技は？」

「趣味は研究・開発に好奇心のままに行動すること。で、特技は剣術に手品だ。」

「彼女はいますか？」

「残念ながらないな。」

「好きなものと嫌いなものは？」

「好きなものは女性の恥ずかしがつてる顔に恐怖に染まつた顔、それからなにかを我慢している顔だな。嫌いなものは、俺の邪魔をするやつ、話を聞かないやつに意味なく人を傷つけたり、巻き込んだりするやつだな。」

「・・・先生つてもしかして？..」

「違う！ドジだ！！」

「いやいや、そんなに威張つて言つてじやないと思つんだけどー！」

？」

「質問は終わりか？」

「じゃあこのクラスでタイプの娘は誰？」

「そうだな。みんな可愛いから迷うが、じいて言うなら明石・綾瀬・

桜咲・長谷川・富崎だ。」

「何故その五人に？」

「明石は一昨日ここに着いた時に喋って元氣でリアクションも良かつたから。桜咲は凛とした感じで、更に剣術やつてみたいためだからだな。綾瀬と長谷川は思慮深そうで考えて行動できそだから。最後に富崎は、小動物的で臆病な雰囲気が俺の心をくすぐる。」

「本屋逃げろー！！」

最後の富崎の時に薄く笑いながら言つと、身の危険を感じたのか富崎はビクついている。可愛いなあ

「まあ質問はこれくらいで終わりな。じゃ、国語の授業で。」

時間もなくなつたのでインタビューを切り上げ。手を振りながら教室を出た。

さて、授業の準備でもするか。

「裕奈、あの人先生だつたんだねえ。裕奈は聞いてなかつたの？」

休み時間になりまき絵がコーリさんについて話しかけてきた。

「ぜーんぜん、聞いてないよ。私もびっくりしてるし。」

何で先生なのに不法侵入してたんだろ。

「はあ、疲れた。」

今日は2・Aの授業はなかつたが他のクラスで三時間授業をした。緊張はなかつたが、さすがに初授業だったので少し疲れた。

「さて、書類仕事も終わつたし帰るか。」

周りの教師に挨拶をして帰ろうと席を立つと同時に、

「良かった。ヨーリ先生まだ帰つてなかつた。」明石が職員室に顔

を出した。

「どうした、明石。何か話か？」

「2・Aのみんなで先生の歓迎会を準備したから呼びに来たんだよ。」

歓迎会か。まさか俺にも有るとはな。しかし、校舎内で勝手に飲み食いして大丈夫なのだろうか？

「新田先生。いつ言つてもらつているのですが大丈夫なんでしょうか？」

とりあえず、主任の新田先生に聞いてみる。

「ん？ああ、羽目を外し過ぎなければ大丈夫ですよ。生徒たちの好意ですし楽しんできてください。」

「そうですか。わかりました。では、行つてきますね。」

正式に許可を頂いたので明石といつしょに職員室を出て教室に向かう。

「ねえ先生。気になつたんだけど、どうして一昨日は不法侵入してたの？」

「そつちの方が面白そうだつたからな。」

「ええー！？」

そんなことを話しながら教室に着いた。

「あつ来た！？」

「先生遅いよ。」

「ほら、こつち座つて。」

「はいはい。」

教室に入ると何人かに引つ張られ真ん中に座らされる。

「よし。みんな揃つたね。じゃ、『かんぱーい。』」

しばらくみんなと喋つていたが、さすがにあのハイテンションには疲れたので壁際で休んでいると。

「大丈夫かい？」

「ん？アンタか。別に大丈夫だ。ただ、あのハイテンションに疲れ

ただけだからな。」

いつの間にか合流していた高畑がやつてきた。

「すぐに慣れるよ。麻帆良だからね。」

「そうかい。じゃ、そろそろ生徒と交流していく。」

まだあまり喋っていない生徒の方に向かおうとするが、

「午前1時に世界樹前の広場に集合だそりだ。警備の説明と顔見せをするみたいだよ。多分、テストがあると思つから準備をしておいた方がいい。」

「はあ、わかつた。」

一方、その頃のリタは。

「つまりあのバカユーリは、

旧世界に行つた

世界樹で木刀を作りたい妖怪について調べていた

神鳴流を見よう見まねで練習していた

完全魔法無効化能力にユーリと私が使えるオリジナル魔法が通用するか研究していた

何故か教員免許を持つている

とりあえず、わかつたのはこれくらいで。これらの情報で推測できるユーリの居場所は、（妖怪と神鳴流で）日本の（世界樹と教員免許で）麻帆良に居て。教師をしているはずだけど、完全魔法無効化能力がわからない。麻帆良に能力者が居るの？うーん、まあ行つてみればわかるでしょ。よし、なら早く準備を「ダメですよ。行かせる訳にはいきません。」ちょ、なんですよ。」

「なんでって、只でさえボスがサボって仕事を溜めてるんです。代

理まで居なくなつたら誰がやるんですか。とにかく、溜まりに溜まつた仕事を終わらしてから行ってください。わかりましたか！」「くつ、わかつたわよ。やればいんでしょう、やればもう、ユーリのバカー！！」

五話 説明×模擬戦×お兄様？（前書き）

長らくお待たせしました。

今回も少しずつ書いたので変な所が有るかもしませんが、どうか
ご容赦をお願いします。

あと、感想で行間が空いてないので読みにくこと言わされましたので、
一応今回は行間を少しあけてます。

五話 説明×模擬戦×お兄様？

「寝まい。もう帰つていいか？」

わざわざ夜中に呼び出され、長々と仕事の説明。更に、麻帆良が狙われる理由を聞かされるなんて飽きない方がおかしいだろ。狙われる理由もこいつら馬鹿共のせいだし。はあ、めんどくせえ。

「すまんがもう少し待つてくれんか。後は、実力確認のテストだけじゃから。」

確認か。別にガングロ倒したんだし必要ないと思つんだが。

「相手は誰だ？」
「そうじやのう、特に決まっておらんし、希望はあるかの？」
「誰でもいいのか？」
「かまわん。」
「おつ、マジで？なら、魔力封印無しのエヴァンジェリンと闘いたい。」

真祖と殺したことなんてなかなか無いから興味あるし、真祖の不死性はどの程度までなら再生するのか実験だな。

それになにより、あのエヴァンジェリンを虐めて、あのプライドをへし折り、屈伏させてやつたら絶対楽しいだろうな。
そんなことを考えていると、爺は慌てたように頭をかきながら

「それは無理じゃよ。」

と却下された。

「は？？なんでだよ。てめえが誰でもいって言つたんだろうが。」

「それはそうじゃが、エヴァンジエリンの封印は誰にも解けないんじゃよ。諦めてくれんか。」

「なに言つてんだ？魔力封印は学園かつて「ちょっと待つた！！」んだよ高畠？」

「なんでその事を知つているのかわからないけど、それは言わないでくれないかい？」

エヴァンジエリンの封印について喋りつとしたら高畠が急いで言葉を被せる。

そして、気づかれていなかエヴァンジエリンの方をチラチラ見ながら口止めをしてきた。

しかし、どうやら茶々丸と会話をしていて、エヴァンジエリンは気づかなかつた様だ。おもしろくねえな。

「わかつたわかつた。今回はエヴァンジエリンを諦めてやるよ。」

「すまないね。代わりと言つたらだけど僕が相手をしようか？」

「却下。代わりは、さつきから敵意剥き出しの高等部の女と桜咲だ。」

「

仕方なくエヴァンジエリンは諦めたのに代わりがむさ苦しおつさんの高畠なんて嫌に決まっている。

それなら女の子を虚めて楽しむ方が100倍マシだ。

「実力差が有りすぎんかの？それにまだ生徒じゃしの。」

「大丈夫だつて。ハンデ付けるし、人数も女の子だつたら増やしていいから。とりあえず、呼んでみる。」

「仕方ないのう。高音君に刹那君、こいつに。」

「「はい。」「

爺に呼ばれ、二人がやって来る。
俺の方を睨みながらだが。

「何でしようか、学園長?」

桜咲が呼ばれた理由を爺に問いかける。

「うむ。一人にはコーリ君の模擬戦の相手になつてもらいたいのじ
や「やります。やらせてください！！！」

爺が言い終わるとほぼ同時に高音が承諾をした。

ほとんど考えずに答えるな。桜咲は近衛関係、アイツはガングロ
の敵討ちか？

「そつそつか。では、刹那君は？」

高根の勢いに若干吃りながら刹那に改めて問いかける。

「やらせていただきます。」

「うむ、わかつた。では、頼むぞい。」

「はい。」「

「それと、各一人づついっしょに戦う者を選びなさい。」

「わかりました。では、私は龍宮を。」

「私は愛衣です。」

ふむ、あの二人か。これは、おもしろくなるな。

「いいじゃん。では、呼んで来なさい。」

爺に言われ、二人はそれぞれ急いで呼びに行く。

「どうやって戦つかを考えていると、四人がやつて來た。

「ではルールじゃが、色々とやり過ぎない様にだけじゃ。範囲は結界内の広場のみ。後は、お主らに任せるわい。」

爺が俺を見ながら色々を強調しながら喋り、後ろにさがっていく。

それを見てから、剣を抜いてこちらに向けながら桜咲が喋る。

「あなたの狙いはなんですか？」

「狙い? よくわからないなあ、なんの事だ。俺は爺に頼まれて教師と警備員をやつてるだけだしなあ。お嬢様が近衛このかだと、なんて知らないだ。

「貴様! …やはり、お嬢様が狙いか!!」

「待て! …刹那止めろ!!」

「ままあまあ落ち着けよ。別に俺から魔法関係に巻き込んだりしない。二ヤニヤしながら答えてやると、桜咲は怒りながら斬りかかって来みつとするが龍宮に止められる。

「そんなの信用できん!!」
「わかった。じゃあ、こいつよつ。この模擬戦でお前らが勝つたらこの学園から出ていいき、金輪際近づかない。だが、もし俺が勝てば罰ゲームを受けてもらう。いいな。」

「いいだろう。貴様を倒し、お嬢様を守る。」「馬鹿! …刹那頭を冷や」「龍宮。」「くつ。」

いい感じに怒りで頭が回らない桜咲は俺の提案を受け入れてくれた。龍宮はそれを撤回させようと声をかけるが、割り込んで止めさせる。

そして、桜咲と喋つていて放置していた高音に意識を向ける。

「で、お前はガングロファイーーの敵討ちってとか?」「ガンドルファイーー先生です!! そうです、あなたの卑劣な手段によつて動けない先生に代わつて、あなたを倒します!!」

「そうかそうか。なら、お前も桜咲と同じで勝つたら俺が出ていき、負ければ罰ゲームでいいか?」

「ええ、構いません。あなたの様な卑怯者、私が叩き出してあげます。」

「はいはい。じゃあ、始めるか。」

適当に流し、斬魄刀を出現させ準備をする。
それを見て、四人を20メートル程距離を取り武器を構える。

「では、準備はいいかの? くれぐれもやり過ぎない様にじやぞ。」「わかつてるつて。」

「「「「はい。」「」「」」

俺たちが武器を構えたので、爺が最後の念押しをしてきたので軽く返事をする。

「よし。では、始め!..」

爺の合図で戦闘が始まる。

まず、龍宮の援護射撃の中桜咲が夕凪を手に瞬動で近づいてくる。

「残念。」

弾を避け、刀を受け流し、体制が崩れた桜咲を高音が影で作った使い魔の方に蹴り飛ばす。

「ぐつ！？」

「おいおい、そんなもんかよっと。」

サイドステップで殺到してきた魔法の射手と銃弾を回避するが、その先には高音が影を身体に纏い強化した拳を振り下ろしていた。

「終わりです！..」

「うわー当たるー（棒読み）。」

スカン。ズドン！！

「へつ！？」

「ふつ、残像だ。」

「つ・・・！？」

高音は確実に当たったはずが、そのまま体を通り抜けたことによる驚き、マヌケな声を上げながら地面を殴りつけた。

地面を殴つたことにより十煙が立ち上ぼり高根と俺の姿を隠したので、声を出させない様に口を押さえながら一気に首をしめて気絶させる。

桜咲達も勝負が着いたと思つたのか動きが止まつていたので、龍宮を後ろから蹴り飛ばす。

「龍宮！？ぐつ。」

「貴様も眠れ。」

龍富がぶつ飛んだのを見て桜咲はやつと氣づくが、俺は桜咲を峰打ちで意識を刈り取っていた。

「続けるか？」

何が起こったのか周りで観戦していた奴らの大半は着いていて無いなか、いち早く気づき距離を取っていた佐倉、いや、愛衣に問いかける。

「いえ、降参します。お兄様。やっぱり負けちゃいましたね。」

五話 説明×模擬戦×お兄様？（後書き）

本当にすみません。

仕事が忙しく、更に体調を崩してしまい全然書けませんでした。

それでも、コツコツ書いてみましたが・・・駄文過ぎで申し訳ない。

次回もいつ更新出来るかわかりませんが、頑張つて早く仕上げたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3608t/>

さあ野菜痛めを作ろうか

2011年10月7日08時37分発行